【音楽科】教科提案

テーマ「見る・聴く・愛する」力を育てる音楽科学習

～「まなざしの共鳴」を軸に，小・中を通した学びのひろがりを考える～

１．研究テーマ設定の理由

(1) めざす子どもの姿〔問題の所在〕

「音楽が好きだ・音楽を自分で（工夫して）歌ってみたい・自分で（工夫して）演奏してみたい・自分で作ってみたい・いろんな音楽を聴いてみたい・友だちと一緒に音楽したい・友だちが好きな音楽にも興味がある・友だちの音楽表現にも興味がある」という子どもの姿をめざす。

つまり自分に合ったスタイルを見つけて《自分を音楽で豊かにし，生涯音楽の基盤を手に入れようとする》子どもたちである。同時に《工夫して音楽を表現したり，友だちとのかかわりからも，自分の音楽的世界を広げていったりする》子どもたちである。

本校の子どもたちは音楽が大好きである。音楽に合わせて身体を動かすことや，表現及び鑑賞の活動においてもかなり積極的な姿を見せている。また工夫して音楽を表現することにも興味がある。６年生においては，単元「私のお薦め３０曲！」の学習で友だちが好きな音楽にも関心を寄せ，どんどん好きな音楽の種類や楽曲数を増やしている。

一方，中学校での学びを視野に入れると，楽曲を成り立たせている諸々の要素を比べて聴いたり，音楽的に考えて表現したり，音符や記号から音をイメージして表現したりする活動では問題があり，小学校での成果が十分とは言えないらしい。指導計画上の（表現活動の基盤となるであろう）いわゆる実践に即した楽理的な分野の取組や工夫，定着の度合いが今ひとつ進められていないところがその原因であろう。

《生涯音楽の基盤》を保障する点からも，この問題の解決を図らなければならないと考えた。

(2) 研究の内容と範囲

●子どもたちが《自分を音楽で豊かにする》ために，

①授業前において，ねらいを明確にして広く教材の収集・選択・制作に努める。

②教材提示の工夫で音楽への関心・意欲を高める。

③授業展開の中で，少しずつ「自己決定」をさせながら音楽とのつきあい方を身に付けたり，技術的な困難さを克服したり，自分から進んで音楽に取り組もうとしたりする態度を育てる。

④心身の発達に合った学習指導過程を組むことで，豊かに音楽を感じ取る心を育てる。

〔例〕真似や繰り返しを喜ぶ低学年では，モデル効果を重視するとともに，ていねいに十分な繰り返しを織り交ぜながらねらいの定着を図る。身体を動かすことが大好きな間は，身体から音楽的な要素を入れていく。とりわけ聴感覚・聴機能に優れている中学年頃をめどに，様々な音や響きの聴き分けを楽しい活動の中に仕組んでいく。高学年では知的好奇心を刺激して幅広く音楽に触れさせていく等々。

●《工夫して音楽を表現する》ために，

⑤聴き比べたり，表現して比べたりする活動から，音楽的な判断力を養う。

⑥音楽の様々な組み立て方（順序性やしくみ）を，聴いたり表現したりする活動から，音楽的な思考力として定着させていく。

●さらに《生涯音楽への基盤》を保障するために，

⑦教材に（視覚的な）モデルを用意して，子どもたちに目標感をもたせる。

○幅広い種類の（映像も含めた）鑑賞教材を収集を図る。〔第１・２年次の研究範囲〕

⑧小・中学校を通した学びのひろがりを，（小学校側から）意図的に用意する。

○表現及び鑑賞の活動を通して，表現する力の基盤を育てる。〔本年度の研究範囲〕

隣接する附属中学校を何度か訪ねた。実際に行われている授業での子どもの様子を参観したり，中学校での大まかな年間指導計画の情報を得たりした。もちろん情報交換も行った。「音楽が必修である小・中学校９年間(475 時間）で，目の前にいる１人の子どもにとってどのような学習が展開されているのか〈学習内容の全体像〉」や「情意面を含め，最低限どのような力を小学校で養わなければならないのか〈小学校における学習内容の欠落部分の点検〉」を，小学校学習指導要領がめざすところのものと比較しながら検討してきたのである。結果として，階名唱や音符（音価）等をはじめとする楽典的事項に関する知識の定着度や表現の基盤となる楽理的な理解が十分でないことが判明した。

ここで，先に述べた「めざす子どもの姿」を達成する意味から，小学校音楽科６年間の授業内容をそのねらいも含めて再度洗い直して，柔軟に対応しなければならない必要性を見いだしたのである。

余談であるが，小学校５年生から中学校２年生にかけての圧倒的な授業時間数の削減がもたらしている危機的な状況には今さらながら驚かされた。平成 13 年度から比較して，最大マイナス 100 時間（４年間の音楽総授業時数：280 → 180 時間）にもなる。さらに中学校では和楽器必修，校内音楽祭・卒業式等での合唱準備に多くの時間を費やしている実態が加わり，学習指導要領をある意味で具現化している教科書の存在そのもの（幅広い内容）が機能しなくなっている現状があるように思えた。

(3) 研究テーマ

「見る・聴く・愛する」力を育てる音楽科学習
～まなざしの共鳴を軸に，小・中を通した学びのひろがりを考える～

標記の研究テーマを掲げて３年次となる。１・２年次は研究テーマ「見る・聴く」に焦点化し，鑑賞指導の充実を中心課題として幅広いジャンルの鑑賞教材の収集や量的拡大などに一定の成果を得た。今年度は「愛する」に焦点化し，この力を一方で支える「表現する力の基盤を育てる」ことを中心課題に取り組んだ。

〈研究仮説〉

◎楽曲〔歌唱曲〕における歌詞の働きに着目し，様々な表現活動を通して言葉と音のかかわりを明らかにするところから，子どもたちに音楽を表現する力の基盤のひとつが育つであろう。

(4) 仮説実現のために〔研究の方法〕

①主に高学年（５年生）を対象として「曲想」に焦点を当て，歌詞の働きに着目した。
②教科書１冊をまるまる教材対象として扱い，学ぶ意味の意識化と学習内容の定着を図った。
③「しらべる⇒くらべる⇔あらわす⇔つくる」一連の学習活動を設定し，総合的に理解できるようにした。また「あらわす」では，音符を書く活動にも必然性を求め積極的に取り入れた。
④歌詞を文節に分けて，意味内容を動作化し朗読することで音楽化していく方法を考えた。
→ NHK 教育番組「にほんごであそぼ」を活用した。
→《言葉・動き・音楽》を連動させることで〔歌詞〕文節⇔部分動機〔音楽〕の関係を感覚的に捉えられるようにした。
⑤学習活動における子どもたちの意見や作品等を，適宜，学習中に一覧表示し活用することで，相互の影響（共鳴）を誘発し学習効果を上げるようにした。さらに研究評価としてこれらから子どもたちの変化・変容を捉えるようにした。
→コンピューターソフト Excel の活用した。

(5)「意味と内容」がひろがる音楽科の学び〔研究の視点Ⅰ：学校の研究主題とかかわって〕

昨年度の音楽科提案においても述べたが，本校の研究主題：「意味と内容」がひろがる学びの創造－互いのまなざしが共鳴することによって－の基本的コンセプトを「指導目標の明確化（目

標分析）と内容の改善（目標を支える歌唱・器楽・創作・鑑賞の４領域充実と相互にバランスが取れた活動）から，自己教育力を養うために子どもの側に立った研究を行う」と捉えた。そのために，まず子どもの認知面を見つめるところから研究の手がかりとした。

同年齢異能力である学級集団の子どもたちは，自分の生活経験の中から，学習時，彼らなりの様々な受け止め方（発言・表現）をする。そこで，すべてを受容する（子どもの立場から見た）学習指導のあり方をすると同時に，それらを生かしながら教科としての望ましい方向へ導く方途を探った。したがって「意味」を教科あるいは教材が持つ「存在理由あるいは学習の目標＝意味」という考え方をひとまず後ろに下げ，子どもが音楽的な対象に出合ったときや，自分に取り込もうとするときに感じる“学ぶ対象が持つ存在理由”とした。つまり，生育歴，個性差に始まって音楽的な経験差，個人差によって子どもたちの音楽的な受け取り方は様々である。当然プラスばかりでなく「そんなの意味ない（分からない）」とマイナスの評価に分かれることもある。どのような反応であっても，そこにその子どもが持つ固有の“意味＝受け止め方”を見いだしたのである。「感じた」まま自分なりの（稚拙であっても表された）言葉に潜む“わかりやすさ”にも注目した。しかし，自分なりに「感じ」たままの言葉であれば，多くの場合一般性を帯びない。ここに（子どもが捉えた）“意味”をひろげていく必要性・必然性がある。具体的には，個人的・個性的である「感じ」を尊重しながら，客観性・課題性がある「気付き」へと目を開かせていったのである。

「意味」が子どもの立場から出発して普遍性に向かうのに対し，「内容」は教師の立場からのアプローチである。「内容」を構成するものは，教材及び指導法である（学習指導要領では指導法については“内容の取り扱い”としている）。その範囲は，「関心・意欲・態度」を高めるもの，「思考・判断」及び「表現・技能」の力を付けるもの，歌唱・器楽・創作・鑑賞を支える「知識・理解」事項そのもの，及びそれらを生きたものとして身に付けさせるものの収集・計画・実践・検証である。簡単に言ってしまえば「内容」は，小学校学習指導要領の音楽科の各学年の目標を具体化した内容及び内容の取り扱いのすべてであるが，あまりにも大雑把かつ大局的であるので，本校研究の過程において検討を加えて単元・教材開発など具体的で独自なプランを出していくことにした。

このような考え方から，事例の単元では「曲想」について次のように学習を進めた。

【「曲想」について】

◆子どもたちが捉えた「曲想」の意味（事前調査の結果）。

〔曲想 ⇒ 曲の感想，曲の気分，どういう思いで作ったか，曲のイメージ，曲の感じ〕

◆指導者が捉えた「曲想」の意味。

「曲想」とは楽曲固有の表情や味わいのことであり，それは様々な音楽の諸要素の働きによって生み出されているものである。歌唱曲では歌詞も曲想に関わる重要な要素の一つとしてとらえる必要があり，「歌詞の内容」には，意味的な内容だけでなく，その背景にある情景や心情なども含まれる。[*]

*文部省(1999)『中学校学習指導要領（平成 10 年 12 月）解説－音楽編－』教育芸術社，p.21

（＊著者注）「曲想」の説明として明確に定義していると思われるので，『中学校学習指導要領解説－音楽編－』から引用した。

◆子どもたちがこの単元で獲得し，ひろげた「意味」とは，

①「曲想」を成り立たせている，歌詞の内容をはじめとする音楽の諸要素の働きを感じ取ったことである。

②クラスの仲間たちと，自分たちの言葉で諸要素の働きを一つ一つ明らかにしたことである。

③自分が見つめる音楽のよさをもとに，友達が見つめる音楽のよさに触れたことである。

④自分も友達も経験したことがない未知あるいは既知の音楽を，先生や友だちの助けを借りて，そのよさを見いだしたことである。(③と④にはそれぞれ「まなざしの共鳴」がある)
⑤自分が感じているよさには，音楽的な様々な要素が関わっていることに気付いたことである。
⑥これまで何気なく過ごしてきた自分のまわりに，たくさん音楽のよさに触れる機会があると気付いたことである。

◆子どもがこの単元で学習し，ひろげた「内容」とは，

様々な楽曲を通して「曲想」を感じ取っていった。「曲想」を具体的な音楽の諸要素に照らし合わせた言葉で話し合ったり再表現していく姿はもちろんのこと，獲得した知識を駆使して「つくる」活動を行ったことである。もちろん，具体的にひろげていった内容は子どもたち一人一人によって異なっていることが様々な記録から分かった。

2．音楽科学習における“まなざしの共鳴”〔研究の視点Ⅱ：学校の研究主題とかかわって〕

学級で学習する醍醐味は，何といっても「集団の（学習）目的機能」ともいうべき「凝集性」が発揮されたときであろう。互いのまなざしの共鳴である。本単元ではいくつかの節目を用意した。「曲想」という大きな学習対象に対して，学級の子どもたちはまわりの友だちたちの様々な感じ方を共有しながら，それらを統合しなければならない。要素的にはリズム・旋律・フレーズ・音色・強弱・速度・和声などの働きが関係する。次に「曲想」への理解を深めたあと，作曲というまったく創造的な面からのアプローチがある。幸い子どもたちは積極的である。「いま何が分かり，何が分からないのか」と問題の所在を明確にすることで，子どもたちの相互作用は発揮されると考えた。これらの活動から見えてきた子どもたちの姿は，次の４点であった。

①比べて違いが分かるが，どのように言い（書き）表してよいか分からない。
②言葉だけ比べても違いが分かりにくい。
③表現しても比べたいが，一人ではうまくいかない。
④最終目標が作曲といわれても……。自信がない。

①音楽的語彙の不足からみられる症状であるが，できるだけ子どもの工夫した感性あふれる言葉を引き出したいと考えた。曲想表現で最も大きな割合を占めるのが，「強弱・速度・音色」の３つである。また言葉のイントネーションは「音高（音の高さ)」に，言葉のリズムは「音価（音の長さ)」に影響を与えることも比較の材料となる。意味を伴った音楽的語彙を獲得するチャンスとなる。そこで比べた結果を楽曲ごと〔１６曲〕一覧表を作り，お互いに情報が行き渡るようにした。

②おそらく「意味が通じるフレーズ単位で比べていけばよいのではないか。」と気付くだろう。言葉とフレーズの関係を感じ取らせるときに大切となるのは，「旋律線：フレーズの盛り上がり（ライン)」や「曲の山」，一歩進んで「和声」の扱いとなろう。子どもたちが感じ取った様々なことを，音楽的に助言できるよう十分な事前の楽曲分析が必要と考えた。

③違いが分かることと表現できることの間には「技能」が介在する。学び合う仲間が協力してお互いの表現を確かなものにする助言が必要となろう。誰と誰を結びつけるかが教師としての力量の問われるところであろう。〔「思考・判断」が「技能」を介在して「表現」へと繋がるのである。これを支えるものが，本単元に対する「関心・意欲・態度」であり，繰り返し表現していく中で定着するものが「知識・理解」である。〕そこで交互唱などを取り入れた。

④事前調査の結果，作曲には 14 名（35 名中）が「(自信がないから）作りたくない」と表明している。「作ってみたい」子どものうち３名は作った経験があり 18 名は経験がない。

「自信がない」子どもたちには，「手伝ってあげよう」というボランティアの子どもたちを組み合わせることで，子どもたち同士ばかりでなく教師も助け合って「作る」にチャレンジした。この際，「空」をキーワードに１６曲*で曲想を聴き比べたり，キーワード「空」を含む歌詞を自作して気に入ったものを自由に選ぶなど，曲想を感じ取る活動の充実が「作りたくない」と表明した子どもたちの内発的動機を高める鍵となったのである。

*５年生教科書（教育芸術社)，歌唱曲の約 30 曲中，16 曲・29 カ所に「空（ソラ)」が登場している。